
俺伝説～超能力英雄伝～2 二人の少女と魔法と二度目の世界

俺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺伝説〜超能力英雄伝〜2 二人の少女と魔法と二度目の世界

【Nコード】

N7837L

【作者名】

俺

【あらすじ】

一人の英雄の物語から10年。

英雄の手によって変えられたその世界での超能力者はその当時の3%ほどまで減っていた。

とある日曜日。秋葉原。

そこで二人の少女と一人の男が会う。

そして欠けた歯車が埋まり物語はまた動き出す。

〈序章〉再起動（前書き）

まず謝罪を。非情に申し訳ないのですがこの物語、中途半端な事に二巻からスタートしています。そのためいろいろと理解できない設定が出てきますがそこはご了承ください

あとこの作品。今のところはまだグロテスクな表現は出てきませんがこの後多々出る予定ですので注意してください。

もしそれでも読んでいただけるのならどうぞお楽しみください。

く序章く再起動

東京、秋葉原。日曜日。そこには多くの人がいた。そこには小さな電化製品店に交じって多くの玩具店が並ぶ。しかしその内容は『常人むけ』とは言えない。

そのターゲットはオタクやマニアと呼ばれる人々に絞ったものが多い。その人たちはつい最近まで悪い見られ方しかされていなかったものの、一人の男が見事にその人たちの大半を

まとめ上げ、演説などで支持を集めそれを日本中に広げ今まで疎外されていたその人たちの評価を上げて行った。

今では常人と同じ扱いになるまでにもなっていて、今現在もその人物を含め評価は上がる一方だった。

その秋葉原。その人ごみの中を歩く二人の少女がいた。一人は短髪でボーイッシュな印象を受ける少女。もう一人は後ろで髪を束ねていた。普通に言うポニーテールだ。

そのポニーテールの子が短髪の子に手をひっぱられどんどんと人気のない路地裏へと進んで行く。その路地裏。勘だけでたどり着いたその場所は道が前、3、4mだけがひらけて四角いスペースができていた。どこかの店の裏口らしい。

短髪の少女はふと何かを感じ取り自分の左横を見る。そこには予想もしなかった一人の男が

いた。その男は二十歳くらいで短髪。周りによく見るような服を着ていた。腰を抜かしその少女

女はそこに腰をおろしてしまう。その男は手を差し伸べる。

「大丈夫？」男はからっぽの笑顔を浮かべながら言う。

「あ・・・」そう言い短髪の少女はその男の手を握り立ち上がる。それを確認すると男はその少女に話しかける。

「ちよつと話しいい？」

短髪の少女はその言葉に対して頷く。それとほぼ同時。後ろの道から少し遅れてポニーテールの少女が出てくる。しかしその少女は後ろでただ啞然とし、驚いている。

「魔法つてあると思う？」馬鹿げた質問だった。魔法など童話やゲームなどに出てくる架空の物事と決めつけているその世界では。しかし男は表情をほぼ変えずに言う。だがそれが馬鹿にして言われた事じゃないのはなんとなくわかった。

「それって、ゲームやアニメに出てくる、あれ？」

「まーそれと同じようなものかな？」

「あつたらいいと思うけど」少女はその時思った事をただ答えていた。

その少女は今現在、不登校の高校生。そして今、少女はネットで知り合ったその少女と出かけていたところだった。

中学校でいじめにあい、中3からずっと引きこもっていたその少女。その間、自分の寂しさを埋めるためかアニメや小説、漫画と言った物語にどっぷりとつかって行った。

そしてその少女にとっては魔法と言うのはPやレベル次第で何でもできるものだった。しかしそんなものが現実に無い事。あると信じたくても、信じられないくらいの思考はあつた。だからこそ出てきたのがその答えだった。

「じゃあ、その魔法がホントにあつて、君にその才能があつたとしてらどうする？」

「魔法の才能？」

「そう。魔法の才能。もし魔法を使いたいと思ったならここに行けばいい」そう言いながらその男は短髪の少女に名刺サイズの厚紙に地図と住所と電話番号が書かれたものを渡した。「何の苦勞もなしにつてわけには行かないし、時間もかかる。だけど君はすごい魔法使いになれる才能を持っている。その魔法を覚えればゲームや漫画までは行かないけど結構便利に使えるはずだよ？」

「ホントに！」短髪の少女は嬉しそうに言う。この少女は生活が便

利になることがうれしかったわけではない。ただ単に魔法が本当にあつて自分にその才能がある事がうれしかった。

「もちろんさ。ちよと手、出してくれる？」その時、全く関係ないその言葉が男の口から出てきた。

しかし少女は何も考えずその言葉に従い右手、手のひらを上にして差し出した。

男はその上に自分の片手をかざす。

「っ！」その少女の右手に痛みが走った。それとほぼ同時に手を自分の体に引き戻す。注射の時のような痛みだった。しかしそれよりも軽い痛み。ただ単にびっくりしてその声が出ていた。

「おまじないだ。体には何も起こらないから安心していいはず。ま、魔法つかうようになったらまた会うだろうさ。じゃ」そう言い男は歩き出した。

「まって！」それを短髪の少女は止める。男は止まり後ろを振り返る。それを見て少女は言った「名前は何？」

男はそれに応え得ながら首を正面に戻す。「僕は圭二^{けいじ}。高瀬圭二^{たかせ}だ。」その時ちょうど見えなくなっていた圭二の表情が一瞬、崩れた気がした。

そして圭二は歩き出し、大きなと通りに出てすぐ曲がって行った。そこにいた少女二人はしばらく動かなかった。そして3分くらいしかポニーテールの少女がもう一人の少女に話しかける。

「よかったねー？圭二さんに話しかけられるなんてっ」悔しそうに笑いながらその子はもう一人の子の背中をたたく。それと同時に「パンッ」と言う音が響く。

「たっ？」

まるでその状況を理解していない短髪の少女は「何が？」と言う顔して言葉を返さない。

「『たっ？』じゃないよ？圭二さんだよーあの人。」

「んー？」

「よくテレビとかにも出てるのに、知らないの？」

「知らないよー。それよりもここ行ってみよう?」そう言いながら短髪の少女はさつき圭二にもらった厚紙を見せる。

「んー今から?」

「うん!」

「しょうがないね、いくか」その声は今までと違いだいぶ低かった。下がりはじめていた。

そしてその二人の少女はその厚紙に書かれた場所へ向かう。

この出来事を境に欠けていた歯車が埋まり世界は動き始める。新たな物語を語るために。

く序章く再起動（後書き）

楽しかった。もし、そう思ったのなら。

続きを読みたい。もし、そう思ったのなら。

自作を期待して待つていてください。

絶対だします。だからもう少し待つてほしい。

いつ出すかは解りません。次は面白く仕上がるかさえ解りません。
しかし続きは絶対だします。その時はなにとぞ・・・

ついでに言つとこれ読んだだけでは自分では面白いと思えません。

第一章 少女・魔法・魔術（前書き）

第一章 少女・魔法・魔術

1

二人の少女はある高級マンションの目の前にいた。

「ここ、だよな？」

そう言った短髪の少女の隣ではポニーテールの少女がマンションの階数を数えていた。が、途中でやめる。どこを数えたのか解らなくなっただからだ。

「高いな」

その言葉を聞いた時、短髪の少女は思う。『さっきと全然違う。そんなすごい人だったのかなー？』『うん・・・』別の事を考えていたからなのか素っ気無い返事になってしまっていたのが解った。

数秒、二人の間から会話が途切れる。その間、二人の頭の中ではいろいろな思考が渦巻いていた。だからかその間、徐々に次の言葉が出しにくくなって行くのが解った。

「行こう？」完全に何も言えなくなる前に。と、短髪のその子が言う。

「そうだな」そう言いポニーテールの子は歩き始めた。それについて行くようにもう一人の子が歩き出す。

当然、1分とかからずにそのマンションの入り口につく。そして自動ドアをくぐる。そこはポストとかがあるあのスペース。はつきり言って無意味に広い。ポストの正面の壁には管理人室と立札を貼った窓があるがカーテンが閉まっている。短髪の少女が奥とそこを区切る自動ドアの正面、真ん前に立つ。しかしドアはピクリとも動かない。上半身を左右に曲げてみたりジャンプしたりしているがやはりその扉は開かない。

「これ・・・」さっきと同じような声色でポニーテールのその少女はもう一人の少女に言う。その声に気づき短髪の少女はその少女の方を向く。その少女の前には部屋番号を入力するタイプの呼鈴があ

った。

短髪の少女は顔を真っ赤にし、動かなくなる。まるで時間が止まったかのように二人とも動かない。

「部屋番号、わかる？」ポニーテールの少女の低い声はその息の詰まるようなその沈黙を崩す。

「えっと」そう言いながら短髪の少女はポケットからさつき圭二にもらった厚紙を取り出す。「506号室だって。そこで出てきた人に『圭二の紹介だ』って言えだって」

「わかった」そう言いながらその少女は部屋番号を入力し始めた。

『はいーどーなーたー』

女の声だった。その声は陽気にスピーカー越しに話しかけてくる。「あの、圭二さんにここへ行けば魔法教えてもらえるって聞いたんですけれど・・・」そう言っているところを見ると、その少女はここまで見る限り乗り気じゃなかったのがただ単に感情を表に出してなかっただけと言う事が何などなく伝わってくる。少しでも魔法に興味があったからこそここまで来たのだろう。

「圭二の知り合いー？今、開けるから部屋まで来てねー？」

そのスピーカーからプツと言う受信を切った音が聞こえた。それとほぼ同時にさっきの自動ドアが開く。

「いくぞ？」横に突っ立っている短髪の少女にそう声をかける。

その少女について行くようにもう一人の少女は歩きはじめる。

エレベーターに乗って階数選択用のボタンをポニーテールの少女が押したときだった。

「ねー」その言葉を聞いた頃からエレベーターが動き出す。小さな音と同時に空気が重くなったようなそんな感覚を受ける。

「？」

「鈴ちゃんてさ、ブログの時と全然」それを言いきる前にポニーテールの少女、鈴は言う。

「それは人として言うてはいけない事だ。この後、できるなら言わないで。あともう着く」真面目な表情。短髪の少女の方は向かず、

そう言っていた。

その階につくと機械音と同時に扉が開く。そして二人は歩き出した。

「ごーまるろく、ごーまるろく」そう言いながら短髪の少女は部屋のプレートを見ながら奥へ進む。

「あつたよー」そう言い短髪の鈴は少女の方を向く。そして動かなくなる。1分くらいしても両方とも全く動かない。そこで短髪の少女が話しかける「なんでこっち来ないの？」

「うん」そう言い鈴は歩き出した。

そしてドアの前で鈴は足を止め、方向をその506号室のドアへ向ける。そしてまた二人の動きが止まる。

「呼鈴・・・」なんとなく迷っているような、そんな口ぶりだった。「なぜ、そこで私に？」そう言った鈴の顔を見て短髪の少女は呼鈴を鳴らす。

『はいー！』ドアの内側からそんな声が聞こえてくる。

ガチンと言う金属音と同時に扉の鍵が開く。それとほぼ同時にその扉が開き20代の女が出てくる。茶髪で凄い美人だった。『ナイスバディ』だった。しかしそこに男はいない。当然か誰もそれには反応しなかった。

「圭二の知り合いの人だね？中、入って？」

二人は招かれるままその部屋へ入って行く。進むとそこにはリビングがあった。そこは立体的な構造になっていて普通の一軒家と比べても2倍近くの広さがあった。

二人の少女は部屋のほぼ中心に置いてあるソファーに座るように指示される。さっきの女はそれを指示すると別の部屋に入って行った。

短髪の少女はそのソファーに座ると周りを見回す。「ねーねー鈴ちゃん？」

「なに？」

「すごつく広いよー！」

「そうだね。」ただ声に何の変化もつけず鈴はそう言う。

「……」短髪の少女は次の言葉を口にすることはできなかった。数分の間。その部屋で会話は完全に途切れ、外のバイクや自動車のエンジン音などしか聞こえなくなる。

そしてその数分が過ぎたころ。二人が入ってきたリビングの出入り口の方から『ドタドタ』と誰かが走って来るような、そんな物音が聞こえてくる。

二人の少女が入ってきたリビングの出入り口から今度はさっきの女が部屋に入ってくる。「えっと……圭二から何か預かってない？」二人のいるソファーに近寄りながら。歩きながらその女は話しかける。

それを聞き短髪の少女はポケットの中を手さぐりで何かを探し始める。それとほぼ同時にその少女には他の二人の視線が向いた。

一分後。ポケットを手さぐりで探る、焦りきっていた短髪の少女の顔から笑みが映る。完全な沈黙だったその約一分間。誰も何も言えず、妙に長く感じたその沈黙。それを短髪のその少女の笑顔が、その動作が完全に緊迫しきっていたその部屋の空気をまるでいつも自分がいるその場所のようなそんな物へと変えた。

「はい！これ、圭二って人からもらいました！」そう言いながらさつき圭二にもらった名刺サイズのその厚紙をその女に差し出す。女はそれを左手で受け取る。それを裏返したり扇いだりして調べる。その後その女はその厚紙に手をかざした。

そうするとその厚紙が青白く光り。一度全体が光ったように見えたが光が徐々に収まり始める。しかし一定の場所だけは光を保ち続けているのが解る。二人の少女の方から見ると左右が逆になり読みにくい。そこにはしっかりとした文字が浮かび上がった。

その目の前の二人は僕ん弟子だから面倒見といってあとそのうち顔見せるからその事あの『お嬢様方』によろしく言っ
て

その文章に目を通すと女は「勝手だなー」とつぶやき苦笑いをする。「圭二来るまで君たちの面倒見てて書いてあるけど」その厚紙を差し出し言う。美希はそれを受け取る。少しその言葉が止まった5秒ほどだ。だけどそれを長く感じたのはなぜだろう。「ここに寝泊まりでもする？」正面の二人の顔を見、首をかしげながらそう言った。

「しません。私は『魔法』を教わりにきたんです。」一要は敬語。しかし口調は変わらない。しかしさつき言葉は故意に出てきた物ではなく自然に出てきた物。いわゆる天然だ。しかしその事を二人が知るのはまだだいぶ後の事。

「弟子ってそつちのことかー」照れながら頭の後ろを書きながらそんな事を言った。

『なんだと思つてたんだよこの人は！』言葉には出さない。だが鈴は疑問と警戒と、あと少しの好奇心。それを持って確かに心で怒鳴っている。

「そう言えば自己紹介まだだったね？私は壱。加羅鎌壱からかま いちって言っただ！よろしく！」

「鈴です。よろしくお願いします。」

「わたしは美希みき！これからよろしくお願いします！」ポニーテールの少女はそう名乗る。

三人の頭の中本人の頭の中にさえ『あれ？』と言う言葉と違和感が湧く。中途半端に敬語が混ざっていた。しかし誰も突っ込まない。ただど次の言葉も出てこない。この三人の考えている事に大差はない。だがそれを誰も口には出さない。

そんな沈黙の中で美希の方からぐうーとまるでアニメに出てくるかのようなそんな音が聞こえた。美希は顔を赤くし苦笑いをしながら両手を腹に当てる。

「えーと」壱が『困った』。そう表情を浮かべた。「お昼ご飯食べ

る？」

美希は照れながら、はい。と答える。

壺はそれを聞きソファから立ち上がり二人の座っている場所からは陰になつて見えな

いキッチンへ向かう。そして冷蔵庫を開け言う。「あつれー？からつぽだ 買いに行かなきゃないよね・・・」壺が陰から二人に対し顔だけが見えるように出し、続けて問う。「手伝ってくれる？」

「はあ。」答えたのは鈴の方。

2

三分後。美希はまるでその上機嫌を体で表すかのようにスキップをしながら一方4、5mの道路が二車線しかないその道を近くの大通りの中にあるスーパーに向け進む。当然そこには壺と鈴もいる。しかし考えている事はみなバラバラだ。

圭二の事を考えている奴、ただ単に喜んでる奴、そして一人は何も考えてさえない奴。目的地は一緒なのにここまで方向性までもがバラバラだとある意味凄い気もする。

「おっひーる！おっひーる！おっひーいーるごーはーん！」美希が歌い始める。まるで野球などでよく応援などに使われるそんな感じのテンポ。しかしそれは一分と続かずに途切れる。

三人の行く前方。まさにその大通りのあたりから、轟音。そうとしか言いようのない音が聞こえた。それとほぼ同時に歌が途切れる。

その後、一秒と空けずに風が吹く。両側を数10mあるビルに挟まれていたその道をコンクリートの粉末を含んだ爆風が。

「え？」壺はそれに気づき一瞬で理解する。その時思わず言葉を漏らした。しかし最低限の事。自分の顔を守るために腕を顔に当てる。しかし他の二人は何もできずその粉末が目に入る。その粉末が目に入ったことに対して声を上げる。

「たっ？」

「んっ！」

目が痛いのだろう。二人とも両手で痛みの原因の粉末をこり取る
うと目をこすっていた。

爆風自体はたいしたほどでもない。日常で起こってもおかしくない
くらいの風の強さ。しかしそれでもまとまっているコンクリートの
粉末を飛ばすくらいの力はあった。しかし不思議な事に人の悲鳴
や逃げるその姿が全く無い。

その約一秒後。ある程度離れた場所からゴツゴツといくらものコ
ンクリートの塊同士がぶつかる鈍い音が聞こえた。

「あれー？どこの子だろ？止めなきゃいけないよねー？」誰に話し
かけるわけでもなく、そう独り言を言った壱はさつき一度戻した右
足をもう一度、前に一歩出す。そして上半身だけを回し後ろを一度
振り返り少しそこにいた二人に言う。「くる？」鈴は頷き歩きはじ
めるが、美希はまだ粉末が取れないらしく目をこすっている。

そんな事とは関係なく二度目の爆発が起こる。

ドゴン。と、鈍く乾ききった音が響く。コンクリートが砕け、弾
け、ぶつかり合う。そんな音が重なり合った音。その後、一秒と空
けずに爆風が訪れるが今回は三人とも目をつぶるなどして直接的な
ダメージをほぼ押さえる。

「あーあ。あんなの止められるかな？」目を開け少し離れたその
通りを見て不安げに。しかし明るく。壱はそんな言葉をつぶやく。

「？」鈴はまだ今から壱がやる事にたいしても見当が付かずただつ
いて行く。しかしそれ以前に鈴はまだ今起こっている事さえ理解
できていない。

「まってー」そう言いながら美希が走って追いかけてくる。「あつ
ち危ないよ？」

「なんで？」

「だってほら」そう言い美希はある場所を指差す。その先はさつき
まで大通りにある少し高めのビルが建っていたところ。しかしそこ
にはもうビルは無かった。

「ん？んー？」その先を鈴は眺め、そして考える。美希が何を指し

たいのかを。それに気づき苦笑いしながら声を上げる。「あ！」数秒間が開く。そして「壱さん？」口調こそは変わらない。しかし焦っているのは見て取れた。

「なーにー？」

「あれって？」汗が顔を流れ落ちて行っただのが解った。

「んー。あれもたぶん魔法なんだよねー」

「・・・」言葉が途切れた。その時鈴は思う。ふざけた言葉とは裏腹に。自分が今、踏み込もうとしているその場所が実は自分が思い描いていたほど楽な世界じゃないのだろう。と。それどころかともなく危ない世界なのだろう。と。

それを自分の心に浮かべた瞬間鈴は何かを言おうとする。しかし何も言えなかった。いやそれは少し違う。言わなかった。おそらくその表現が正しい。

鈴はいつもの自分だったらここで迷わず帰って行く事は解った。しかし今そうしようとは思えなかった。それがどこから来るのかははつきり言って、解らない。だけど『帰りたくない』『ここで引き下がりたくない』と思えた。

しかしそれが壱にその今、自分が問おうとしている事を解いた瞬間崩れ去るような気がしてならなかった。

だからこそ数m前にいる壱に向かって何も言わずに踏み出した。

「まだ付いてこれる？」歩き始めた鈴に対し振り返り壱は意味深な言葉^{いみしん}を發した。

「もちろん。」笑みを浮かべ、まるでそう答えるのが当たり前かのように鈴はそう答える。

「美希ちゃんは？」それを。同じ意味を持つその問いを今度は鈴の数mさらに後ろにいる美希に問う。

「なんで？」数秒開く。そしてまた美希が口を開く。「鈴ちゃんがいくんだもん。私だって行くよ？」同じ意味を持つ言葉でも二人に對し起した現象はだいぶん違った。だが二人とも出した答えは寸分違わぬ物だった。

「そつか」ついてくる二人を見てそう言い体の正面を通りに向ける。そして、歩き出す。

3

五分ぐらいで三人はその大通りに出た。そこには一人の男がいた。黒髪で身長が160?。普通の一般人と言つイメージを受ける。とくに特徴もないその人物。その男がこつちに足を進めながら喋り出す。

「あなたが『ケイジさん。』ですか?」三人を見てそう言う。妙な片言の日本語だった。しかしその男は見るからに日本人。その言葉はからかっているようにも思える。そして続けて話し始める。「おつ!失礼しました。自分が名乗るのが礼儀ですよネ?」それを聞いていて三人は何も言わない。そしてその男は話を続ける。「私はアーサー・エドワード・ウェイトと言うものです。それでお訪ねしますが、あなたのお名前八?」

アーサー・エドワード・ウェイト。1850年後半から1942年ころまで実在した魔術師。薔薇十字友愛団の創設者でウェイト版タロット製作者の一人。

これが壱の知っているアーサー・エドワード・ウェイトにたいしてのすべての情報。壱は名前を聞いただけでそこで何が起こっているかの大方を理解する。だからこそ壱はウソをつく。

「私が圭^き二。だけど何の用?ウェイトって昔の魔術師でしょう?そんな偽名^{ぎめい}まで使って。あとできるなら町を壊すこともやめてほしいな。魔法使いさん?」それと同時に壱はポケットに両手を入れる。

「偽名じゃないのですが。ま、それは後でいいでしょう。それでケイジさん、一緒に来ていただけないでしょうか?来ていただけないのなら力ずくでも。と、言う事になってしまいます。できるならこちらモこれ以上の被害八出したくないのですが。あと私は魔法使いじゃなく『魔術師』ですよ?」まだその男は足を止めず、近付いてくる。

「んーなんで私があなたについて行かなきゃならないの?私を誘拐

でもする？」そう言いながら壱は右手をあごの少し下で手前。ちょうど胸の上で広げ自分を指す。「このかぁーいー美少女、誘拐しちゃうー？」喜んでいてそれを隠しているような動作を見せた。たぶん冗談だ。そのとんでもなく上機嫌からなる言葉に対し壱の後ろにいる二人はそう思う。

「私は依頼されましてネ。依頼主はあなたを連れてコイと言っているのですヨ。どうします？戦いますか？逃げますか？それとも投降でモシマス力？」

そのおそらく冗談であるその言葉をほぼ無視し、そのウェイトは。魔術師は壱に問う。

「んー」そう言って壱は真上に紙を放り投げる。それは開いたままなのにもかかわらず10m近く上空まで飛ぶ。それとほぼ同時に魔術師の足も止まる。

三人がその紙を見ている間に壱はそこから消えた。そして空から声が聞こえる。まるでメガホンでもつかっているようなそんな声。「私を倒せたら、ついてってあげてもいいよー？あと逃げはしないから安心してねー。あとふたりは安全なところにいてよー？」もう一度空を見る。しかしそこには紙が一枚空気の抵抗を受けゆらゆらと落ちてきているだけでそれ以外には空しかない。

「こざかしい事をするモノですネ？ケイジさん？」そう魔術師はつぶやき一度止めた足を逆の方に向け進める。

魔術師は数メートル進み道路と歩道の間にある車にたいしての標識をつかむ。そうするとまださびてさえないその鉄パイプが手と地面の真ん中あたりでちぎれる。その魔術師が怪力なわけではない。しかしその鉄パイプは音も立てずにちぎれる。そしてその手に持たれている鉄パイプがみるみると形を変えて行く。その手が触れている場所から上下5？位ずつに変化はない。

それより上はまるで潰したかのように薄くなり一辺5？位の長さがある菱形になって行く。そして長さも縮まる。ちぢ

もともと2m近くあったそのパイプと標識は30秒とかからずに

剣になった。全体は銀色で統一され、デザインは中世ヨーロッパなどの戦争のイメージに出てくる剣その物だった。

「さあーて」そう言いその魔術師は剣をわきに挟みポケットをあさり始める。「やんちゃな子には、お姫様とテお仕置きが必要ですね？」そう言いポケットから煙草とマッチの入っている箱を取り出し一本、煙草をくわえ他のたばこはポケットに戻す。そして箱からマッチを一本取り出し火をつける。その火を煙草に移しマッチを捨てる。そして斜め前にあるビルの一つの4階窓際をにらみつけた。

4

1分ほど前。壱は魔術師の斜め後ろにあるビルの中にいた。その壱はちょうど魔法を使い、メッセージを伝え終わったところ。

窓の下で魔術師からは陰になって見えないところに腰を下ろす。そしてため息をつく。「こ、こ、こ、殺されるかと思った！」それを言い壱は一度息を落ち着ける。「ただどウエイトってあの人、圭二に何する気だろ？それに相当強いし、ともに戦って勝てるわけ無いよねー？」そう言いながら周りを見回す。「ん？」そこはどこかの会社のオフィス。日曜とはいえ誰もいないのは不審に思う。それとさつき爆発が起きたのに全く人が騒ぐ声は聞こえなかった。「人がいない。か。だったら・・・」

そう言いもう一度魔術師の方を見ようとする。しかしその瞬間まるでその部屋の温度が一気に下がったようなそんな感覚をおぼえる。

声を上げる事さえできなかった。しかしゆっくりと魔術師がいた方を覗く。少し場所は変わっていたが魔術師は右手にさっきまでは持っていなかったはずの銀色の剣を持ってただけで大して変わってはいなかった。それをわきに挟み、煙草をくわえ、時代遅れなマッチでその煙草に火をつける。まだ火が付いているマッチを下に落とす。こちらを睨みつける。

「やっぱいっ！」そう言いすぐその窓際から離れる。

しかしそれとほぼ同時に外では地面に響くようなさっきまでとほ

ぼ同等の大きさの轟音が鳴り響く。魔術師がその立っている場所を爆発させていた。それと同時にビル街近くの窓はほとんどが割れる。足元全体を爆発させたわけじゃない。魔術師は足元のアスファルトを円状にくり抜き、厚さ10?の内、下の3?くらいと回り半径1mを爆破した。そうすることで浮かび上がる距離は有に地上4階の高さを超す。

上空で一瞬止まり徐々に高度が落ち始める。しかしそのスピードと大差なく壱がいるそのビルにも近づく。

4階。壱がいる場所。今はまだ必死に逃げようと走って出口に向かっていている途中。そこにキーン。と、鉄と鉄が擦れあう音。そんな音が響く。

そして壱は後ろを振り向く。そこにはあるはずの窓枠がなくなっていて代わりに一人の男が件を下に突き刺し、しゃがみ込んでいた。「また会いましたネ? ケイジさん。」そう言い笑みを浮かべると一瞬にして魔術師は壱との距離を詰める。その時点で距離約1、5m。完全に剣の攻撃範囲内だ。左側に押しつけていた右手ごとまるで鞭のように振り壱の上半身を真つ二つにしようとする。

しかしそこにはもう壱の体はない。のけぞるような形でその一太刀をかわしていた。勢いよく後ろに引いたせいか力があまり、後ろに跳ぶ。しかし壁には当たらない。宙を浮いていた。壱はそのままガラスを破り外に放り出される。しかしその一瞬。服のどこかに忍ばせてあったのだろう手榴弾を右手に握り、左手でピンを抜き自分が放り出された窓からビルの中へと投げ入れる。

物騒。その言葉がしっくりくるその道具は魔法使いの常備が義務付けられている物の一つだ。もし魔法使いが何か問題を起こした場合、それは兵器や銃器より魔法の方が解決しやすい事が多い。そのため『もめごとは各自で対処』と言う感じの法がある。

当時その法が成立すると今度は魔法以外にも一定の武装の許可を求める声が膨れ上がった。しかし許可は下りずその代わりにそれが義務付けられる事になった。

そのため壱が持っていたその武器。それが今音を立てながら二度バウンドする。そして爆発。

轟音と共に周囲に撒き散るその爆風は壱をさらに飛ばし道を挟んで向かいの10m近く離れているビルに放り込む。

ガラスを突き破り建物の中に転がり込む。立とうとする。その時、体全体いくつもの場所から痛みを感じる。今の今まで無かったものだ。おそらく転がり込んだ時ガラスでもつけた物なのだろう。

「たっいなー」立ち上がり窓から外を見る。向かいのビル一つ上の階からは、いまだに煙が上がっている。壱はズボンの後ろのポケットからボールペンを取り出す。くるくると回しながら近くにあった事務業務用の机に何かを書いて行く。二重の円。その中に上下逆にある程度、間隔をあけて正三角形が収まっている。それを壱はバン、と右手で叩く。そうするといくつかの大きな音を立てながら形が変化していく。5秒。その間に事務作業用の机は形を変え別なものへと変化している。剣だ。さっき魔術師が持っていたものとデザインはほぼ同じ。違うと言えば少し柄の部分が少し長く、さらに全体的に一回り大きい。その剣は銀色に輝きを放つ。「もう、死んでるかもしれないんだけどね・・・」

しかし唐突に何かが向かいのビルから飛び出す。残念ながらの予想どおり。魔術師。その男は銀色の剣を両手で握り大きく振りかぶって壱に襲いかかる。

「くっ！」壱が剣を盾にし、その一太刀を抑えきる。

「やりマスね？」魔術師はにやりと笑い半分バカにしてそう言う。

無理やり剣を振り切り壱を飛ばし自分も少し下がりがり5mくらいの距離をとり剣を構えなおす。両方ともまだ攻撃範囲にはある程度の距離がある。「武器は大きな鎌と電撃ダと聞いていたのですが。剣も使うのですネ？非常に面白い。面白いですヨ？圭二さん。だから私もここからは手加減はしませんヨ？」それと同時に魔術師は自分の立っていた地面をけり出す。腰を下げ低い姿勢で壱の懐に踏み込む。さっきと同じように右腕ごと体の左に巻いていた剣を勢いだけ

で振り上げる。それに対し壱はそり返りそれをかわす。

「くっ！」何かに気づき壱は声を上げようとする。しかしそれは何の意味も持つ事は出来ない。

拳。それが完全にそり返っている壱の背中をはじきとばす。いくら戦闘ができると言っても女性。魔術師のはなつたその拳でやすやすと体が宙に浮いた。魔術師が体勢を立て直すスピードとほぼ同じに壱の体は上昇する。1、5 m。ちょうど魔術師の目線に当たる所まで壱の体が浮く。その無防備な体、腹に魔術師は剣ではなく肘でエルボーを入れる。

一瞬でいいまで上昇するだけだった壱の体が鈍い音を立てながらコンクリートにたたきつけられる。「がっ！」壱が思わず声を上げる。そして目を開けるとその目の上には剣があり、今にも魔術師はそれを突き刺そうとしていた。壱は体を転がしギリギリでそれをかわす。そして体制を立て直す。

体を起こし、しゃがみ込んだ状態にした時。背中になにかが当たったのを感じる。そこには壁があった。「ん！」何も言う事は出来なかった。その魔術師の突きが壱の頬をこすり、後ろの壁を貫き刺さる。その時、壱の瞳には魔術師の顔が移された。わざとか偶然かさえ分からないが魔術師の突きが外れたその状況。しかし魔術師は不気味にも笑みを浮かべていた。

まだ魔術師が放った突きは止まらない。それどころか魔術師が剣を突き刺したその壁は音を立てながら崩れ始める。さらに壱を巻き込みながら魔術師は大通りに対して並行にあつた道に放り出される。「クっ！」その言葉と同時に魔術師は手のひらから何かを放った。そのせいか壱はさらに飛ばされる。しかし魔術師はそれで体勢を立て直す。

二人は地面に着地する。同じような能力を使つてだ。着地したのはちょうど道の両側で二人の間に距離が10 m近くある。そこで初めて二人が足を止め睨み合う。その瞬間、魔術師の周りにゴツゴツと音を立てながらコンクリートのかけらが落ち始める。しかし魔術

師は視線をそらさない。そう思った瞬間だった。魔術師がその場から消えた。何かを感じ取り壱は真上を見上げる。4、5 m上。そこには両手で剣を振りかぶり、今にもそれを振りおろそうとしている魔術師がいた。紙一重で壱はそれをかわす。そして右足を魔術師の真横のあたりまで踏み込みそしてその剣を両手で勢いよく薙ぎ払う。しかし魔術師は後ろに2、3度跳ぶ。それで一気に壱との距離を広げその剣の攻撃範囲から逃げる。そこからは攻防が一転し壱が攻めに回る。魔術師は大半の攻撃をかわし不可能となり場自分の持つ剣でその攻撃を止める。

「どうしたの？魔術師さん？」バカにしてただ壱の攻撃をかわすことしかしていないその魔術師に壱は言う。

「私がただかわしただけだトでも？戦略とは大事なものですヨ」そう言いながら魔術師はまだ壱の一撃をギリギリでかわす。「あなともなかなかの魔術師だ」また一つ今度は帰ってきたその刃を魔術師はかわす。しかし壱は手を止めようとはしない。そして壱はそこで完全に道路を渡りきる。今二人がいる場所はもとと魔術師が立っていた場所だ。今度は壱が剣を斜めから降りおろす。しかしそれも当たらない。しかし視線は下に行きそこに落ちていた何かに気づく。「私ヨリ下。しかし強イ。だからこそ栄ヲ評してこれを使わせていただきます。」そう言い魔術師は一步踏み込む。そして片足を壱の後ろ脚を軽くけりバランスを崩させ前に出るしかない状況にする。そして斜め後ろに回った魔術師は剣を握っていない左手を差し出した。そこには何かが書かれていたしかし確認する時間など無かった。壱はすぐに対応に出る。しかし到底それが間に合うことなどあり得ない。そこでは壱の真下に一つのカードが落ちていた。何やら魔法人らしき模様が描かれたものだ。そして一秒とたたずそれが爆発した。

5

五秒後。壱は爆発のあったその場から飛ばされ今やっとで立ち上がったところだった。

「いったいなー」そう言いながら周りを見回す。そうすると5m先。土煙りの中。そこには人影があった。そしてその影は一步また一步とこつちに近づく。乾ききった足音を立てながら。

「まだ生きてました力。さすがですネ？」その言葉と同時にその人影が何かを投げたのが解った。

剣。魔術師が放ったそれは壺のさつきとは逆の方をすれながら通り抜けて行く。軽くかすったその頬からは血が垂れ始める。

轟音。壺の真横を剣がと通りすぎてから1秒とたっていないかった。爆音にも似たその音の次に今度はコンクリートがぶつかりあう音が聞こえた。その時、壺は想像してしまふ。『本当に魔術師が狙ったのは自分ではなく大通りにいた二人なのではないのか』と。

だからこそ反応が遅れた。

だからこそ間に合わなかった。

優しかったからこそ負ける。

壺はそうなる事。それが油断だと言う事も解っていた。しかし優しかった。だからこそ次の一撃をくらう事になった。

「甘いですよ？ケイジサン？」そう言う魔術師はもう壺の正面にいた。そこで体制を低く右の拳を握りそれを腰から上を回しその拳を壺の脇腹にたたきこむ。その壺の体はさっきの剣で穴が開きもろくなった壁などやすやすと破った。そしてそのまま壺の体は大通りの道路近くまで飛ばされる。そしてそこから転がる。そして道路の中心あたり。そこでやっとで止まる。その土煙から放り出されたボロボロの壺を見てそこに一人の少女が走って行った。

「壺さん！」美希だった。魔術師が放った剣とは全く別の場所にいた美希。美希は走って壺の所へ向かう。何が自分にできるかなんてわからない。ましてや相手はまだ武器を持っているかもしれない。魔法も使える。しかしただ後ろにいる事などその少女にはできなかった。

走って壱に向かう美希にたいしてまだ鈴はただ美希の後ろで啞然としているだけ。まだ何もすることもできなかった。そして美希は壱のところまで行くとしゃがみ込みあおむけになっている壱が気絶しているだけなのを確認し、まず一息ついた。

「んー」砂煙の中からそんな声が聞こえてくる。「その人ハ」コツコツと硬い靴底がコンクリートをたたく音と一緒にだ。「ケイジサンではなかったのですか？」足音が止まる。二人のだいたい2mくらい離れたところだろう。

今起こった物事を理解し、自分が何もできないことくらいは解っていた。しかしどうにかしようとその二人のいる場所に鈴が走りだす。

「動くな」静かに魔術師は言う。それはすぐに鈴の耳に入り歩き始めたその状態で動きが止まる。「私の質問二答えてもらえませんか？」沈黙。それが十秒ほど続く。そして再び魔術師は話し始める。「まずはじめ二聞きマシヨウ。その人ハ『ケイジサン』ではな力つたのですか？」

なぜそうなったのかは知らない。しかし美希は涙目で魔術師を睨みつける。目をつむり大声で言う「この人は壱って人だもん。なんで、なんで壱さんがこんなボロボロにされなきゃいけないの！壱さん何にも悪い事なんてしてないでしょ！それなのにこんな・・・もう帰って！帰ってよー」まるで泣きつくように涙をぼろぼろと流しながら美希はそう言った。しかしその少女はその涙が恐怖から来るものではない。そんな気がしていた。

「そうですか。まあ、いいでしょう」そう言うと魔術師は逆の方に数歩歩く。そしてその数歩のち魔術師はそこから消えた。その瞬間魔術師に叫び付けた美希の肩の力が抜けた。それとほぼ同時。それを感じ取ったように鈴が走りだす。壱の後ろまで行くと肩に手を乗せ『大丈夫か？』と聞いてくる。

「うー」何か言おうとしているのが解った。ついさっき泣きやんだばかりなのに美希はまた、泣きり出す。「こわかった。こわかった

よー」泣きながら鈴の足に抱きつき美希は言う。

何も言わず鈴は美希を見て思う。『美希はすごいな』と。『自分はそこまで行けないんだ』と。そして 一度笑みを浮かべると美希を見る。

「わかった。だからまず先にまず壺さん運ぼう？」そう言い、しゃがみ壺の左腕を持ち担ぎあげる準備を整える。まだ泣きやむことさえできない美希は涙を服でぬぐいながら鈴のそれに頷く。

そして二人は壺を担ぎ今来た道に戻って行く。

6

マンションまで戻ってきた。今ちょうど一つ目の自動ドアをくぐりそのある程度のに広さがあるそこにいた。そこで二人は重大な事に気づく。

部屋のロックの解除の仕方が解らない

二人同時にさっき呼び出しに使ったインターホンを見る。

固まった。そのちょうどボタンを押しやすい高さに斜めにカットされたシャレているデザインの岩の上面にはカードか何かをかざすためにあるのだろうスキヤナーや呼び出す際の部屋選択用のボタン、部屋からその人物を確認するためのカメラなどが埋め込まれていた。だがそこから策など一つも見つからない。だからこそそこから動きが消えた。さっきまで死の境界線あたりにいたとは思えないほどの気の抜けた空気だった。しかし二人はとんでもなくまじめだったのは言うまで無い。

30分。次の人がそこを通るまでの時間だった。その30分間そこからは完全に動きが消えていた。当然、三人もそこから全く動かない。そして二人の耳に後ろから不意に人の名前が入る。

「壺？」

二人が降り返るとそこには少し自分たちより年上くらいの少女がいた。外国人なのだろうか、髪は長い金髪で瞳は明るい緑色。かな

りの美少女。だが真っ先につくイメージはその『美少女』ではなく服装だった。ドレス。真っ白なデザインでスカートが一般的なイメージより短め。しかしその飾り付けから真っ先に受けるイメージはドレスだった。その少女は二人が背負っていた女が壱である事に気づくと肩にかけていたハンドバックを落としそまで走る。そしてぼろぼろでも息がある事を確認すると「あなたたちは？」と問いかける。言葉は冷静だった。だがその少女があっせつしているのは見て取れた。

「美希です」振り返りその少女を見て美希は名前を名乗った。

「いやそうではなく、なんでこんな事になって・・・」

正面をその少女に向け美希は話し始める。「えっと。さっきあつちで」そう言いながら美希は大通りの方を指す。「なんかアーサーって言う人と戦ってしたらボロボロにされちゃて・・・」なぜか美希は涙目になり始め今にも泣きだしそうだ。

一度息を落ち着けその少女は言う。「だいたい事情は解りましたわ。すみませんが病院まで運ぶの手伝ってくれますか？」二人は少女のその言葉に頷いた。落ち着いたからなのか口調が変わっていた。普通にあり得ないと思った。こんな口調の人が現実にいるとは到底思えなかった。けど頷いたその二人の前にいる少女は確かにそんな口調でしゃべっていた。

30分後。四人のいたのは近くの病院。そこは6階建てで見た目はマンション。どこから見たって外見では病院には見えないし大っぴらに病院と機能しているわけでもない。無免許と言うやつだ。基本的に表ざたにできない大けがなどの手当てをしてくれるところだが普通に比べて治療費が5倍近くかかったりする。その病院の待合室。そこに美希、鈴とさっきのドレスが参人並んで座っている。そしてそのドレスの少女が話し始める。

「えーと。あなた方が壱と一緒にいてそのジルと言う人物に襲われたのは解りましたわ。そこで質問なのですがなぜあなた方は壱と一緒に？」

「圭二さんがしばらくきさんのところで魔法教わっててっ」そう鈴が言った。そうするとそのドレスの少女は目をつぶり急にわなわなしながらつぶやく。

「まったあの方ですーのー？」横を見る。そうすると二人の少女が引いてのが解った。そこで一度息を落ち着けそしてまた話し始める。「失礼。少し取り乱してしまいましたわね？」ちょうどそれを少女が言った時だった。ちょうど奥の診察室のドアを開く音が聞こえる。そしてコツコツと足音を立てながら一人の女性が出てくる。白衣をだらしなく着た女性だ。その女は頭をかきながら三人の座っているところへ歩き進める。そして正面にしゃがみ、「なんでさーあんなことになったの？」そう言いながら女はポケットから煙草とライター取り出す。

「それが襲われたらしいんですよ」

まだ少女は話し続けるがそれを聞き流すようにして女はライターを左手から右手に移し、その手で煙草の入っている箱の穴があいている方とは逆の方を軽く指で何度か叩く。そうすると何本かが穴のあいている方から出てくるその中で一番背の高い煙草をくわえそのままその中から抜き取る。そして左手を煙草後ポケットに突っ込み煙草を中に置き、そして左手を口の周りに当て右手に持ったライターで煙草に火をつける。それをくわえたまま一度息を吸い、煙草を右手の人差し指と中指で挟み抜き取り横を向いて行きごと煙を吐く。そして言う「まーあんたがたの難しい話はいいんだけど、けっこー重症だよ？右足脛の骨折、あばらの1、3と、あと6、8が折れてて右手の人差し指と子指の完全脱臼。左肩もただどあれはまだびみょーにくつついてたから亜脱臼。あと打撲が10ヶ所くらい。そして顔に切り傷が二つあった。まーそれだけは血も止まって処理の必要無いだらうけどね。」

「どれくらいで、治りますの？」

「半年ぐらいかな？で、入院する？」嬉しそうに言う。

「いくら、かかりますの？」静かに、悔しそうに少女は言う。

「治療費、診察費、入院費その他もろもろ混ぜて『特別に』完治までで500万！」悔しがる少女とは逆にその嬉しそうに女は言う。その金額に対し少女の横に座りその会話をただ聞くだけだった二人はただただ驚くだけ。

「仕方ありませんわ・・・」そう小さく少女はつぶやく。

「まーいどありー」嬉しそうに女が笑って言う。

一度ため息をつき少女はポケットからどっかの金持ちのおばさんとかが持っていそうなでかく分厚い財布をハンドバックから取り出す。そしてその中からまたこれまた金持ちとかしかもっていない黒色のクレジットカードを取り出す。基本的にこれで買えないものは無いらしい。（一括払い）

「はい」そう言い少女はそのカードを差し出した。

女はそれを受け取らず言う「あー支払いは退院する時でいいよ」

少女はそれに『そう』と応えカードを財布にしまいその今カードをしまったでかい財布もしまう。ちょうどその時ハンドバックの中から携帯の着信音が鳴る。少女はその着信音を放つ携帯電話を取り出しながら立ち上がる。折りたたまれたそれを片手で開き誰からの物が確認すると「失礼」と言いその部屋の出入り口に向かう。その参人から少し離れた場所で通話ボタンを押しその携帯のスピーカーを耳に当て言う。

「もしもし」

『田中か？仕事入ったんだが出れるか？』スピーカー男の声が聞こえてくる。

「ええ。出れますわ。どんな仕事ですて？」

少女がそんな会話をしている時。女医らしきその女は二人の隣に座り話しかける。

「えーと君たちは？」

「圭二さんの弟子！」美希が答える。

「名前は？」少し困ったような仕草をし聞きなおす。

「私は美希。そしてこの子が」そう言いながら美希は隣にいた鈴の

肩をポンとたたき「鈴ちゃん」

「そっか。私は舞。医者やってるんだ。よろしくね？あと、あの子の名前って聞いた？」舞がそう言うのと二人は首を横に振った。

「あの子は田中クリス。あの子この名前、嫌いみたいだね。自分から名乗ることはめったにないんだ。だけどハーフですんごいお金持ちの家の子なんだよ？」ちょうどその時。舞を見ていた二人の表情が固まった。そして舞は後ろから声が聞こえてきた事に気づく。

「あなたって方は・・・人の事をべらべらと・・・」

驚き。恐怖。その二つの感情が頭の中に浮かぶ。そして後ろを振り向こうとした瞬間。頭上にクリスの放った手刀が直撃する。そして今、何かを喋るために開けた口が音をたて勢いよく閉じる。顔ごと床にたたきつけられて。それとほぼ同時とも言おうと思った言葉とは違う言葉が漏れた。

そして床にたたきつけた本人。クリスは床で伸びている舞を確認し、二人に話しかける。「あなた方。ついてくる気はありますか？」完全にびびり舞をただじつと見つめていた二人はその言葉にビクツと反応した。そして二人は同時にクリスの顔を見る。

「仕事の依頼が来ましたの。『魔法使い』としての仕事のね。もし魔法使いになりたいのなら絶対に避けては通れない道。ですが今ならまだ引き返すこともできる。どうします？ここで魔法使いをあきらめてすべてを見なかった事にするのか。それだって今ならまだ不可能じゃない。そしてこの後の事を考えれば誰も攻めないでしょうしね？壱の戦闘を見ているのならあなた方もそれはわかるでしょう？」

その言葉と同時にそこに沈黙が流れた。そして数秒置き、クリスはまた話し始める。「だからできるなら私はそちらをお勧めしますわ。だけど、どうしても魔法使いを目指したいのなら今から3時間後。午後5時に壱のマンションの前に来てくださる？そうしてくだされば圭二の来るまでの間、私が魔法をお教えさせていただきますわ」言いたい事だけ言つとクリスは『それでは』と残しそこを立ち

去る。

しばらくそこにいた3人は動かなかった。1名を覗いて動けなかった訳じゃない。しかし動かなかった。壱のマンションに向かう事もなく。ここから帰る事もなく。ただ二人はおびえることしかできなかった。自分が進もうとしているその常識とかけ離れた道に潜む恐怖に。だがここならまだ引き返す事が出来る。しかし引き返そうとは思えなかった。見栄とかそんなくたらないものではない。好奇心などのような 前向きなものでもない。しかし引き返そうと言う選択肢は取れなかった。

約三十分後。一つの叫び声と同時にそこにあつたか完全な沈黙が破られる。「りゃーう」その意味不明な雄叫びを聞きき隣に座って真面目な顔をしていた鈴は思わず笑みをこぼす。

「なんだ？その雄叫びは？」まだ笑いを止める事さえできないまま鈴は言う。

「んー。だつてこのままここにいたつて今はもう意味無いでしょ？わたしはそうだよ？鈴ちゃんもそうでしょ？」美希は立ち上がり鈴の前に立つてそう言った。

「そうだな」そう言い鈴もそこから立ち上がる。美希はそれを見ると出口に向かって歩き出す。数歩行つて振り返る。そこでまだ一步も出ていない鈴を見て言う。「じゃ、お昼食ベに行こう？」

鈴は何も言わずに歩きだした。

7

ほぼ同時刻。三人のいる場所から距離にして2？ほど離れた駅。その駅のホームにクリスが走りこんでくる。そして今、電車がホームへ到着する事を告げる放送が流れる。

キィと高い音を発しながら電車はちょうどクリスの目の前に自動ドアを置き停止する。完全に停車すると片側一方のすべての自動ドアが開く。そのうちの一つからその電車に乗る。中には言つて周りを見、開いている席が無い事を確認すると近くにあつた手すりに

寄り掛かる。それから数分で電車は発進する。動き始めるときに一度クリスはバランスを崩すが手すりにつかまり体を支える。そして今度はしまったドアに背を預け、肩越しに外を見る。それと同時にさっきの事について少し考える。『もうあの子たちは来ないのでしょね。しかしあの子たちはなぜ圭二に誘われたのでしょうか？何か意味があつたのでしょうか？もしかしたら私は間違いを起こしたのでは？』とかそんな感じにだ。

ここで圭二の名が出てきたのは二人が知り合いだから。しかしなぜクリスが二人が圭二に誘われた事を知っているのか。この事はここまで二人ともクリスには話していない。だがそれは容易に見当がついた。『二人が圭二の弟子と名乗った 二人は壺と一緒にいた 圭二は実力が無い限り自分への動向をさせない 何かの事情があり二人を魔法の世界に引き込んだが実力が無いからある程度、力が付くまで壺のところに預ける』と言う感じにだ。

そして一度ため息をつく。そして一言つぶやく「どうしよう・・・」焦っている。と、言うよりもただ単に暗い印象を受ける表情だった。

〈第一章〉少女・魔法・魔術（後書き）

レビューや感想、誰かくれませんか？

と、言うよりも誰でもいいのでお願いします書いてください。

なにぶん一人で書いている者でどこが良くてどこが悪いのかさっぱり解りません。

とにかくよかったところでも悪かったところでも、できるなら理由をつけてレビューや感想ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7837/>

俺伝説～超能力英雄伝～2 二人の少女と魔法と二度目の世界

2010年10月12日02時28分発行